資 料

大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究**

嶋 信 宏*

A STUDY OF SOCIAL SUPPORT NETWORK MEASUREMENT IN STUDENTS

Nobuhiro SHIMA

A new instrument was designed for measuring social support networks of Japanese university students. First, twelve persons thought to be important support network members for students were identified (for example, father, mother, a close friend, etc.). And then, these twelve members were rated according to twelve social support items. Ninety-six students (males=42, females=54) completed the questionnaire and a factor analysis was conducted. Four factors were obtained and were named as follows: psychological support, instrumental support, problem-solving oriented support and fun / relaxation support. Factor scores of the twelve persons were calculated for each subject and the feature of social support network of each subject was clarified. Through the use of such instrument, social support networks of students could be idiographically understood.

Key words: social support networks, psychological support, instrumental support, problem-solving oriented support, fun / relaxation support.

I 問題と目的

近年、ソーシャルサポート（社会的支援：家族や友人など、ある個人を取り巻くさまざまな人々から与えられる有形・無形の支援）の持つストレスに対する緩和効果や、ソーシャルサポートと身体的・心理的健康状態との関連が注目されてきている。これまでのところ、他者との間に支援的関係を維持できている人は、さまざまなストレスフルな状況に置かれても、支援的関係を持たない人よりは、心身の適応状態が悪化しにくいということが見出されてきている。ソーシャルサポートの持つこのようなストレス緩和効果には、main effect（ストレス

のレベルにかかわらず、ソーシャルサポートと心身の健康状態が関連をもつというもの。direct effectとも言う）、buffering effect（ストレスが低いときにはソーシャルサポートは心身の健康状態に影響を及ぼさないが、ストレスのレベルが高くなるとストレスの影響を緩和して、健康状態の悪化を防ぐというもの）の2つのモデルが考えられており、研究で用いられているストレスの種類、ソーシャルサポートの定義の仕方や測定法、結果尺度としての健康状態の内容、被験者の持つ特質などにより、その効果の現われ方が異なっている（嶋, 1990 参照）。

ところで、ソーシャルサポートの測定法に関しては、これまでに多くのものが開発されてきた（それらの概観については、Cohen & Wills, 1985; Tardy, 1985; B.R. Sarason, Shearin, Pierce & I.G. Sarason, 1987 参照）。

それらを①「どのようなサポート」を②「誰から」受けているか、また③「一般的な傾向を明らかにするのか、個人ごとのサポートネットワークを明らかにするのか」という3点から整理してみると以下のように

* 東京大学 (University of Tokyo)

** 本論文は1989年度に東京大学教育学研究科に提出した修士論文の一部を修正加筆したものである。論文の作成にあたってご指導頂きました近藤邦夫東京大学教育学部助教授に感謝いたします。また、本論文の一部は日本心理学会第53回大会(1989年)、及び54回大会(1990年)において発表された。

なる。

①の「どのようなサポート」という点については、これまでの研究の多くは、直接に援助を意図した行為、すなわち問題解決に必要な情報や物質の提供、はげましなどを中心に扱ってきている。しかし、Rook(1987)の述べているように、そのような行為ばかりではなく、直接には援助を意図していないものの、結果として援助的な効果をもたらすようなソーシャルコンパニオンシップ(レジャーやその他の娯楽を追及する行為を共有すること)も広義のソーシャルサポートとして考えることができるだろう。Rookの研究においては、このソーシャルコンパニオンシップの方が従来扱われていた狭義のサポートよりも広い効果をもつということが見出されており、同様の結果は他の研究者によっても示唆されている(Hays & Oxley, 1986, など)。

また、②の「誰から」については、これまでの測定法は次のように大別される。

a. 具体的な人物名をあげることなしに、対人関係全般についてソーシャルサポートの評定を求めるもの。例えば、CohenらのISEL (Interpersonal Support Evaluation List : Cohen & Hoberman, 1983 ; Cohen, Mermelstein, Kamarck & Hoberman, 1985 : 自己の持つ対人関係について、48項目からなる質問に回答を求めるもの) など。

b. 被験者自身に、重要な関係にある他者の名前を数人あげさせて、その各人についてソーシャルサポートに関する評定を求めるもの。例えば、Tilden & Galyen (1987) のCARSS (Cost And Reciprocity of Social Support : 20人までのサポート源をあげさせた後、その中の重要な人物数人について25項目の評定を求めるもの) など。

c. 家族や友人などいくつかのカテゴリーに分けて、そのそれぞれのカテゴリーごとにサポートについての評定を求める方法。例えば、Procidano & Heller (1983) のPSS (Perceived Social Support : 家族関係と友人関係のそれぞれについて20項目からなる評定を求めるもの) など。

aの場合は、誰との間のサポート関係かということが一切考慮されない。これでは、被験者がどのような機能のサポートを受けているかについては情報が得られても、どのような人との間にサポート関係があるかということについては一切情報が得られない。また、bの場合は回答者によっては自己のサポートネットワーク内の重要な他者すべての名前をあげる被験者もいるだろうが、その中のわずかなメンバーしかあげない者もいるだろう。後者の被験者の場合、実際にサポー

トネットワークのサイズが小さい、つまり重要な他者の数がもともと少ない場合との区別ができなくなってしまうという不都合が生じる。cの場合でも、例えば、同じ家族というカテゴリーに属するといっても、父親と母親あるいはきょうだいではサポート源としての意味合いは異なるであろうが、それらがすべて「家族」として分類され評定されるという曖昧さが残る。そこで、これらの点を解決するには、父親、母親、親友など評定すべき人物を研究者の側で指定するということが考えられる。

さらに、③に関しては、「誰が」「どのようなサポート」を与えるのかという一般的な特徴を明らかにすること(例えば、Griffith (1985) など)だけでなく、個々の被験者の持つサポートネットワークを明らかにすることも今後重要なテーマとなってくるだろう。例えば、臨床場面で何らかの介入を考える際にも、ある個人がどのような人からどのような機能のサポートを受けているのか、また受けられずにいるのか、すなわちその人がどのような社会的資源を持っているのかを知ることが必要になってくるだろう。そのような個人像をとらえるということに関しても、従来の測定法では必要な情報を得ることができないものがほとんどである。

そこで、本研究では、大学生を被験者として、次の3点に関して従来の研究には見られない特徴をもつ測定方法の開発を目的とする。

1. ソーシャルサポートを、直接に援助を意図した行動ばかりでなく、直接には援助を意図していないものの、結果として援助的な効果をもたらすような、興味や関心を共有する、娯楽活動を共にするなどの行為も含むものとしてとらえ、測定する。

2. 父親、母親などの家族成員や友人・先生など、ある個人を取り巻くさまざまな人々が、どのような種類のサポートを与えるのかというサポート源とサポート機能の関連性についての一般的な特徴を明らかにする。

3. さらに、これらの人々が、個々の被験者のサポートネットワーク(ある個人の周囲にいて、その人にとってサポート源となりうるさまざまな個人や集団の総称)の中で、どのように位置づけられ、どのような役割を果たしているのかを明らかにする。

II 方 法

1 被験者

都内の4年制大学及び短期大学の学生96人(男子42人、女子54人)。被験者の平均年齢は20.8歳(標準偏差＝

1.92)。学年ごとの人数は1年生21人(12人)、2年生23人(14人)、3年生35人(21人)、4年生17人(7人)となっている(カッコ内は女子の人数)。

2 測定用具

サポート源としてどのような人々が重要なのかということに関して、先行研究の結果を見ると、Griffith (1985)の研究は、友人(性別は特定されていない)、母親、配偶者、きょうだい、子供、父親という順でサポート源としてあげられることが多いという結果を出している。また、Tilden & Galyen (1987)の研究によれば、サポート源としてあげられる上位5人に入るのは、配偶者・恋人、身内(家族)、友人が大半で、その他少数として隣人、聖職者があげられるという。

以上のような結果及び、我国の大学生の現状をふまえた上で、本研究では、一般的な大学生にとって重要であると思われるサポートネットワークとして次の12人を定めた。

- A: 父親
- B: 母親
- C: 年上のきょうだい
- D: 年下のきょうだい
- E: 最も親しい同性の友人・親友
- F: E以外の大学内の同性の友人
- G: E以外の大学外の同性の友人
- H: 最も親しい異性の友人・恋人
- I: H以外の大学内の異性の友人
- J: H以外の大学外の異性の友人
- K: 自分にとって最も重要な先生
- L: その他自分にとって重要な他者

このようにして12人の人物を定めたのは、ソーシャルサポートネットワークとして重要な関係にある他者を何人あげるかということを被験者に全面的に任せてしまうという方法では、Iの問題と目的の項で述べたように、「どのようなサポートを受けている人を何人あげるか」という点に関する個人差を統制できないという不都合が生じるためである。また、CohenらのISELのような方法ではネットワーク像が全く明らかにならない。そこで、このように研究者の側で取り上げる人物・人数を指定するという方法をとった。

回答の方法は、まずこの12人の人物について各1人ずつ、最もよく当てはまる人物を思い浮かべさせ、その人の名前(イニシャル、ニックネーム等)を記入させる。当てはまる人物が複数いる場合(例えば、親友と見なせる人物がたくさんいる、など)でも、その中で、自分にとって最もよく当てはまると思われる人物一人のみを記入する。

また、当てはまる人物がいない場合(例えば、きょうだいがいないなど)は、名前を記入する欄に×印をつけ、以下の評定は省略させた。

なお、Lについては、その人が具体的に自分とどのような関係にあるのかということについても、記入を求めた。

次に、TABLE 1にある12個のサポーティブな内容を表わす文が、A～Lの各人物と自分自身との関係においてどのくらいあるかということ、1……全くない、2……あまりない、3……少しある、4……かなりある、5……非常によくある、の5段階で評定させた。

この12項目は、先行研究の種々の測定法を参考にした上、被験者にとって利用可能であると知覚される主観的サポート(Cohen & Wills (1985) 参照)を測定することを意図して作成した。内容としては、前述したようなソーシャルコンパニオンシップ的な項目の他に、情緒的、情動的、道具的・手段的なサポートを測るものも含んでいる。

III 結果及び考察

1 分析に用いたサンプル

本測定方法は、A～Lの12人について評定を求めるものであるが、被験者によってはきょうだいがいないなど、必ずしも12人すべてについて当てはまる人物がいるとは限らない。A～Lの各ネットワークメンバーについて、全被験者96人のうち何人が、当てはまる人物をあげて評定したかを以下に示す。

A: 父親	93人
B: 母親	96人
C: 年上のきょうだい	45人
D: 年下のきょうだい	53人
E: 最も親しい同性の友人・親友	96人
F: E以外の大学内の同性の友人	95人
G: E以外の大学外の同性の友人	91人
H: 最も親しい異性の友人・恋人	72人
I: H以外の大学内の異性の友人	57人
J: H以外の大学外の異性の友人	68人
K: 自分にとって最も重要な先生	61人
L: その他自分にとって重要な他者	64人

被験者1人当たり9.3人のネットワークメンバーがあげられていることになる。

以下の分析は、この人数に基づいて行った。

2 項目の因子分析

まず、12の項目を変数とし因子分析を行った。サンプルには、96人の被験者がそれぞれ12名のネットワー

クメンバーに対して評定した96×12=1152を用いた（ただし、前述のように、すべての被験者が12人全部に該当する人物をあげているとは限らないので、実際の分析に用いたサンプルはこれより少なく、891となっている）。

因子分析は、主因子解、プロマックス回転により、因子内容を考慮した上で第4因子まで抽出した。

なお、因子分析は男女別にも行ったが、男女間で因子構造にほとんど差が見られなかったので、ここでは男女をまとめて行ったものをもとに結果を述べることにする。

各因子における項目ごとの因子負荷量は、TABLE 1 のようになっている。

TABLE 1 サポート項目の因子分析

	因子I	因子II	因子III	因子IV
1. おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	.077	.673	.072	.134
2. 一緒に遊びに出かけたりする	.105	.619	.292	-.129
3. 共通の趣味や関心を持っている	.078	.660	-.067	.091
4. プライベートなことについて話し合う	.681	.288	-.078	.063
5. お互いの気持や感情をわかり合える	.629	.196	.034	.075
6. 個人的な悩み事について話し合える	.984	-.064	.021	-.032
7. いろいろな情報のやりとりをする	.101	.348	.025	.457
8. 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときは助言してあげたりする	.500	-.017	.103	.425
9. わからないことを聞いたり、教えてもらったりしあう	.059	.016	.090	.780
10. 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときは手伝ってあげたりする	-.047	-.035	.648	.303
11. 必要なお金や物の貸し借りをする	-.053	.027	.563	.097
12. プレゼントをあげたり、もらったりしあう	.146	.115	.620	-.114

第1因子は項目4、5、6、8の因子負荷量が高く、精神的・心理的な面での支援という内容の「心理的サポート」の次元と名づけられる。以下同様に、第2因子は項目1、2、3の負荷量が高く、娯楽活動や趣味を共有するという「娯楽関連的サポート」の次元、第3因子は項目10、11、12の負荷量が高く、物的な援助や手伝いをするなどの「道具的・手段的サポート」の次元、第4因子は項目7、8、9の負荷量が高く、問題解決のための情報提供という「問題解決志向的サポート」の次元と名づけた。これらのサポートの機能ごとの次元分けは、第1～第4因子がそれぞれ Wills (1985) などの esteem support, social companionship, instrumental support, informational support に対応すると考えられる。

3 各ネットワークメンバーの特徴

次に、A～Lの各ネットワークメンバーごとの因子得点の平均値を第1～第4因子にわたって計算したものがTABLE 2である（ここでの因子得点の平均値とは、例えばA：父親の場合、父親を評定した93人のそれぞれの父親の因子得点を平均したものである）。この表から各メンバーの持つ特徴を見ていくことにする。

TABLE 2 各メンバーごとの因子得点の平均値

	F 1	F 2	F 3	F 4
A (父親)	-.765	-.649	-.125	-.468
B (母親)	.017	.107	.542	.194
C (年上のきょうだい)	-.425	-.306	.105	-.014
D (年下のきょうだい)	-.097	-.004	.215	.081
E (最も親しい同性の友人・親友)	.768	.762	.401	.536
F (E以外の大学内の同性の友人)	.245	.400	.106	.303
G (E以外の大学外の同性の友人)	.363	.188	-.137	-.111
H (最も親しい異性の友人・恋人)	.594	.720	.527	.349
I (H以外の大学内の異性の友人)	-.381	-.338	-.390	-.189
J (H以外の大学外の異性の友人)	-.366	-.334	-.498	-.411
K (自分にとって最も重要な先生)	-.577	-.998	-.939	-.490
L (その他自分にとって重要な他者)	.121	-.053	-.049	.034

まず、A（父親）であるが、第1因子～第4因子すべてにわたって得点が負の値となっている。すなわち、ソーシャルサポートという観点からは、父親の持つ役割というのは極めて小さいということがわかる。

B（母親）は、父親と比べると全般的に得点が高い。特に、第3因子（道具的・手段的サポート）については、12人のメンバー中最高得点となっている。また、娯楽関連的サポート、問題解決志向的サポートでも正の値をとり、家族成員の中では、最もサポート機能が高いと言える。

C（年上のきょうだい）、D（年下のきょうだい）については、いずれも道具的・手段的サポートに関しては正の値となっているが、他のサポートに関しては重要性は高くないようである。また、全般的にDの方がCの方よりも得点が高くなる傾向がある。

E（最も親しい同性の友人・親友）は、すべての因子で正の値をとっており、中でも、心理的サポート、問題解決志向的サポート、娯楽関連的サポートについては12人中最も高得点となっている。親友という存在が、大学生にとっては最も重要なサポート源であるということが言えるだろう。

F（E以外の大学内の同性の友人）、G（E以外の大学外の同性の友人）は、いずれも心理的サポート、娯楽関連的サ

ポートで重要なサポート源となっている。Fについては他の2つのサポートも高得点となっており、すべての点について重要度が高いということが言えるだろう。

H (最も親しい異性の友人・恋人) は、E (最も親しい同性の友人・親友) とともにすべてのサポートにわたって高得点を示しており、極めて重要なサポート源であることがわかる。中でも、問題解決志向的サポートと比べて娯楽関連的サポートの得点が高いことが目を引く。

I (H以外の大学内の異性の友人)、J (H以外の大学外の異性の友人)、さらにK (自分にとって最も重要な先生) は、第1因子～第4因子のすべてにわたって負の値となっている。その中でも、先生の地位は極めて低く、大学生にとっての先生という存在はソーシャルサポートに関しては重要度が低いということが言える。

また、L (その他自分にとって重要な他者) については、「クラブの先輩」「祖母」「親戚」などがあげられていたが、被験者によって取り上げられる人物が多様であるので、一般的な特徴についてはここでは触れない。

以上をまとめると、家族成員(A～D)は、道具的サポートに関しては比較的重要度が高いが、それ以外のサポートについては、母親を除くとあまり重要ではないということが言える。きょうだいは、比較的年齢も近く、価値観なども共有されやすいと考えられるが、精神的なサポートの面では重要な役割を担っていないようである。また、同性の親友と恋人が、二大サポート源であるという結果になったが、親友以外の同性の友人(F, G)が比較的重要性をもつのに比べ(特にF)、恋人以外の異性の友人は重要度が低かった。同性の友人というのは複数の人物が重要であるのに対し、異性の場合は特定の一人のみが重要であるということが言えるだろう。また、先生はサポート源としては地位が低いということが示された。

なお、男女差を見ると、女子の方が全般的に因子得点が高くなる傾向が、特に母親ときょうだい(B, C, D)の因子得点が高くなる傾向が見られた。しかし、その他には各因子ごとにネットワークメンバーの特徴を見ていっても、明白な男女差はあまり存在しなかった。

4 個人像の把握

以上は、全被験者の一般的傾向について見ていったものであるが、本方法では、一人一人の被験者ごとに、各ネットワークメンバーの因子得点を取り出してみるにより、個々の被験者の持つサポートネットワークの様式・構造を個性記述的にとらえていくことも可能である。

以下に、全被験者の中から、興味深いソーシャルサ

ポートネットワークを持っていると思われる者を何人か取り上げていってみる。それぞれの被験者ごとに、各ネットワークメンバーの因子得点をプロットし、その特徴を考察した。第1因子を横軸に第2因子を縦軸に、および第3因子を横軸に第4因子を縦軸にして、図を作成した(FIG. 1～FIG. 4)。

I) 被験者I***

20歳女子。大学2年生。C (年上のきょうだい)、H (最も親しい異性の友人・恋人)、I (H以外の大学内の異性の友人)、K (自分にとって最も重要な先生) に当てはまる人物はあげられていない。

第1因子から第4因子にわたってほとんどすべてのネットワークメンバーが正の値となっている。すなわち、心理的サポート、娯楽関連的サポート、道具的・手段的サポート、問題解決志向的サポートのいずれに関しても、十分に恵まれたネットワークを持っていると言える。中でも、B (母親) の得点が各因子とも高く、この被験者にとっては、母親が重要なサポート源であるということがわかる。また、E (最も親しい同性の友人・親友) よりF (E以外の大学内の同性の友人) の方が全般的に高得点であり、サポートという観点から見ると、親友以上に重要な役割を果たしている友人が存在しているということがわかる。

II) 被験者II****

22歳男子。大学4年生。B (母親)、C (年上のきょうだい)、H (最も親しい異性の友人・恋人) に当てはまる人物なし。

被験者Iとは対照的に、各因子にわたってほとんどのメンバーが負の値となっている。すなわち、全般的に低サポートで、ストレスへの対処などの際に、この被験者にとっては対人関係は重要な役割を果たさないであろうということが言える。その中でも、E (最も親しい同性の友人・親友)、F (E以外の大学内の同性の友人) の得点がやや高くなっているものの、因子得点が0以上なのは、娯楽関連的サポートのみであり、気晴らしや共通の趣味があるなど以外の側面においては、希薄な対人関係の持ち方であるということが言える。その他のメンバーに関しては、さらに低得点であり、この被験者は良好なソーシャルサポートネットワークを持っていない例であると言えよう。

III) 被験者III*****

21歳女子。大学3年生。C (年上のきょうだい)、I (H

*** FIG. 1 参照

**** FIG. 2 参照

***** FIG. 3 参照

以外の大学内の異性の友人), J (H以外の大学外の異性の友人)に該当する人物はあげられていない。

図を見るとわかるように, 家族 (A, B, D) とその他のメンバーが2つに分かれているのが特徴的である。家族は, B (母親) が道具的・手段的支持で正の値となっている以外は, サポートの機能はいずれも低く

なっている。一方, 友人をはじめとするその他のメンバーは, 心理的, 娯楽関連の, 問題解決志向のいずれのサポートとも高得点となっている。すなわち, この被験者の場合, ソーシャルサポートという観点から考えると, 家族以外の人との対人関係が重要性を持つということがわかる。また, K (自分にとって最も重要な先生)

FIG. 1 被験者Iのネットワークメンバーの因子得点のプロット

FIG. 2 被験者IIのネットワークメンバーの因子得点のプロット

FIG. 3 被験者IIIのネットワークメンバーの因子得点のプロット

FIG. 4 被験者IVのネットワークメンバーの因子得点のプロット

が全般的に高得点となっているのは珍しい例である。

IV) 被験者IV*****

21歳女子。大学4年生。D(年下のきょうだい), L(その他自分にとって重要な他者)に当てはまる人物はあげら

れていない。

H(最も親しい異性の友人・恋人)の得点が、どのサポートに関しても、他のメンバーからかけ離れて得点が高い。被験者Iが、どのメンバーも得点が高かった、いわば多極型のサポート源を持っていると言えるのに対し、この被験者の場合は単極型のサポート源であると

***** FIG. 4 参照

言えるだろう。Hの存在により、この被験者は、心理的、道具的・手段的、娯楽関連的、問題解決志向的、いずれのサポートとも十分に得られていると見なすことができるが、もしHの存在がなくなると、被験者IIのような全般的な低サポート型になってしまうということが考えられる。サポートがどれだけ安定して得られるかということから考えると、このような単極型の被験者は、被験者Iのような多極型よりは安定度が低いということになるだろう。

以上は主にネットワークメンバーの特徴から見ていったが、この他にも、サポートの機能という側面の特徴を持つ被験者——例えば、娯楽関連のサポートではどのメンバーも高得点だが、心理的サポートではどのメンバーも低得点であるという被験者、など——も存在した。このように本方法を用いることにより、それぞれの被験者の持つソーシャルサポートネットワークを個性記述的に把握していくことができるだろう。

本方法を用いたこれからの研究の方向としては、これらのようなサポートネットワークを持っている人々が、いかなる心理的健康状態にあるのか、ストレスに対しそれぞれのサポートネットワークをどのように有効に利用し対処しているのか、などを明らかにしていくことなどが考えられる。また、臨床場面などで、この方法を用い、クライアントのソーシャルサポートネットワークを査定し、どのような人からのサポートが不十分なのか、どのような機能のサポートが欠けているのかといったことを明らかにし、サポートが弱い部分を補っていくような形で介入を考えるということもできるだろう。

今回は、被験者が大学生のみであったが、様々な対象に実施することにより多くの資料を集めていくことが必要となろう。

引用文献

- Cohen, S., & Hoberman, H. 1983 Positive events and social supports as buffers of life change stress. *Journal of Applied Social Psychology*, 13, 99—125.
- Cohen, S., Mermelstein, R., Kamarck, T., & Hoberman, H. 1985 Measuring the functional components of social support. In I.G. Sarason & B. R. Sarason (Eds.), *Social support : Theory, research and applications*. Hauge : Martinus Nijhoff.
- Cohen, S., & Wills, T.A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310—357.
- Griffith, J. 1985 Social support providers : Who are they ? Where are they met ? and the relationship of network characteristics to psychological stress. *Basic and Applied Social Psychology*, 6, 41—60.
- Hays, R.B., & Oxley, D. 1986 Social network development and functioning during a life transition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 909—924.
- Procidano, M.E., & Heller, K. 1983 Measures of perceived social support from friend and family : Three validation studies. *American Journal of Community Psychology*, 11, 1—25.
- Rook, K.S. 1987 Social support versus companionship : Effects on life stress, loneliness and evaluation by others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1132—1147.
- Sarason, B.R., Shearin, E.N., Pierce, G.R., & Sarason, I.G., 1987 Interrelations of social support measures : Theoretical and practical implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 813—832.
- 嶋 信宏 1990 ソーシャルサポート研究の現状と臨床場面への応用 東京大学教育学部 心理教育相談室紀要, 12, 63—72.
- Tardy, C.H. 1985 Social support measurement. *American Journal of Community Psychology*, 13, 187—202.
- Tilden, V.P., & Galyen, R.D. 1987 Cost and conflict : The dark side of social support. *Western Journal of Nursing Research*, 9, 9—18.
- Wills, T.A. 1985 Supportive functions of interpersonal relationships. In S. Cohen & S.L. Syme (Eds.), *Social support and health*. New York : Academic Press.

(1991年1月29日受稿)